



上原新ソフィア会会長へのインタビュー

聞き手 経鶯会会長 上原 隆一
(1976年経・営)



上原治也会長(右) と筆者(左)

本年5月、ソフィア会の新会長に上原治也さん(69年経営卒)が就任されました。経鶯会からの会長誕生ということで、上原新会長を丸の内のオフィスに訪ねました。上原さんは三菱UFJ信託銀行の社長、会長を歴任され、現在も最高顧問の要職にあり超ご多忙の処、エコノミアンのためにお時間を頂戴しました。皇居を見渡す立派な応接室でソフィアン同士の気安さから、ざっくばらんなインタビューが始まりました。

大学時代最大の思い出は

……上原先輩の大学時代最大の思い出は何でしょう

上原ソフィア会会長(以下「上原会長」):僕は体育会のバスケット部に所属していましたが、勝てば2部昇格への入れ替え戦という大事な試合がありました。相手は拓大。当時3年の僕は1年の金子君(現ソフィア会常任委員71法法)からのパスを受けたときはノーマークでしたが、何とシュートミスをしてしまいました。ゲームの流れが変わり、それで試合は負け、上智は3部残留、(拓大はその後2部でも優勝し強豪チームとなっていきましましたが)試合後キャプテンの内田さんから一発、熱い気合を入れられました。懐かしく、また大事にしている思い出です。

……それは忘れられない思い出ですね。ところで今回(私も選考委員として)ご多忙な上原先輩にソフィア会会長への就任をお願いしましたが、今後の舵取りについてお聞かせください。

上原会長:春の全国代議員会でも申し上げましたが7つのテーマを挙げました。中でも「絆」の強化が重要で、そのためには①地域・各種ソフィア会との連携強化②学院・大学との連携強化による現役学生(800人規模の留学生を含む)支援をしようと考えています。

……経鶯会についてはソフィア会会長の立場でどう位置づけられていらっしゃいますか。

上原会長:経鶯会の活動は求心力のある素晴らしいもので、講師に経済人、文化人を問わず招聘する講演会では卒業生の興味を引出し(参画意識を高め)、ソフィア会活動に貢献しています。続々と立ち上がっている学部・学科同窓会のお手本と考えています。

「座右の銘」と経済人上原治也の危機

……お褒めの言葉ありがたく頂戴します。ところで座右の銘は「得意淡然 失意泰然」とお聞きしているのですが、この言葉との出会いはどうだったのでしょうか

上原会長:入社3年目頃、社内の英語力選考があり、上智のお陰で結構良い成績を取めました。その後国際部門へ異動となり、ディーリングルーム、ドイツの銀行への出向を経て82~85年ロンドンへ転勤となりました。仕事は資金為替取引で役職は資金課長でした。実はそのとき会社に大きな損失を与えてしまい、管理責任ということで、調査役に降格となり通常5年のロンドン駐在を3年で東京に帰されました。失意の中にありましたが、幸い私には大勢の仲間がいました。社内の友人や外銀出向時代を通じての社外のトレーダー仲間が「上原が帰ってきたのなら激励会をやろう」ということで安直な小料理屋に呼んでくれたのです。その時、床の間の掛け軸にこの言葉がありました。陽明学で勝海舟や安岡正篤なども座右の銘にした六然という「自処超然 処人藹然 有事斬然 無事澄然 得意澹然 失意泰然」という教えですが、掛け軸のその最後の2句が強く印象に残りました。

……失意泰然でピンチを切り抜けられたわけですが、その後社長、会長と昇り詰められた。



上原会長：ミスを許す三菱 UFJ 信託の社風ですね。積極的な人ほどミスを犯すものです。他社では考えにくいのですが、そういう社風がある。それでも降格からというのは珍しいのですが。

……その後どのような経緯をたどられたのでしょうか。

上原会長：座右の銘のごとく、伸び伸びと、淡淡と仕事をしていました。私は一切弁解をしなかった。そんな私を見てくれた方があり、リカバリーのチャンスくれました。社風に救われ、上司、部下、仲間に恵まれました。

……素晴らしいお話を伺いました。最後になりますが好き作家とかいらっしゃいますか

上原会長：藤沢周平、塩野七生、歴史物なんか好きです。

……今日はお忙しいところありがとうございます。時間を大分オーバーしてしまいました。

上原会長：写真を撮るんでしたね。窓側は逆光なので、ユトリロの絵の架かったこちらが良いですね。

やり直しの効く（同期から2～3年遅れの役員は珍しくない）三菱 UFJ 信託の社風と上原先輩の仲間を大切に、絆を作り上げていく人柄に触れたインタビューでした。上原先輩がソフィア会や経覧会を良い方向に導いてくださることも確信できました。

「エネルギーと環境問題を考える」

上智大学経済学部 経済学科長

日引 聡



津波がもたらした原発事故による放射能汚染の問題が起こって以来、「脱原発」や「再生可能エネルギーへの転換」の主張が大きな影響力を持つようになり、「日本は将来どのようなエネルギーに依存すべきか」という点について、いまだ、コンセンサスを見出すことができない状況が続いている。

「原子力発電は、原発事故が起こった場合の被害額まで考慮すると、火力発電よりも費用が高い」と主張する環境経済学者は少なくなく、世論においても、「脱原発」推進の声は多い。はたして私たちは、将来のエネルギーをどのように考えるべきだろうか？

さまざまな社会問題に直面した際、どのような解決先を選択すべきか？を判断する上で役立つ考え方に、「費用便益分析」がある。原発の問題に当てはめて考えると、「脱原発」を選択した場合得られる利益と不利益（費用）を比較して、前者が後者を上回れば、脱原発を選択すべきであり、逆であれば、脱原発を選択すべきでない、と判断する考え方である。

では、**脱原発の利益**は何だろうか？それは、

① 原発事故のリスクがゼロになり、放射性廃棄物処理の費用もゼロになるメリットという点だろう。一方、**脱原発の費用（不利益）**には以下のようなものがある。

① 脱原発によって減少した電力を火力発電で代替することによる費用の増加。

平成 25 年度の発電の燃料費は震災前と比べて、3 兆 8000 億円増えたという試算がある。燃料は輸入しているため、それだけの日本の富が海外に出て行ったことになる。これは、日本の国家予算の約 4% に相当する大きな額である。また、エネルギー費用が高いことは、日本企業の国際競争力を弱める要因ともなる。

② 火力発電への代替によって促進される温暖化のリスク。

温暖化が起こった場合、熱中症による死亡者の増加、台風などの自然災害の増加とそれによる被害（特に、死亡者）の増加、農作物への被害などさまざまな被害が生じることが予想される。この被害と原発事故の被害の両方を考慮して比較した場合、むしろ「原子力発電の方が火力発電の費用よりも

安くなる」可能性が高い。また、近年、熱中症や大規模な水害による人命の犠牲の状況からもわかるように、温暖化による人命のリスクの方が原発事故による人命のリスクより大きい。

③ 再生可能エネルギーのリスク

太陽光発電や風力発電は、天候に左右されるため、リアルタイムに変化する電力消費に応じた安定的な発電は困難である。また、近年、太陽光発電は、「自然景観の破壊」という新たな環境問題を引き起こしている。2012年に、再生可能エネルギーの固定価格買い取り制度が導入されて以来、飛躍的に太陽光発電が増加した。そのことで、遊休地に大規模な太陽光パネルが設置されるようになり、佐賀県の吉野ヶ里遺跡、大分の湯布院をはじめとして、多くの地域で景観破壊の問題が生じている。風力発電については、低周波騒音の問題に起因し、周辺住民の健康被害、生物への影響が懸念されている。

④ トップクラスの技術の放棄によって失われる利益

日本の原子力発電技術は、国際的にもトップクラスである。近年、安倍政権は積極的に、「原発技術の輸出」に取り組み、トルコなどの発展途上国への輸出を実現している。これは、エネルギーの乏しい発展途上国の経済発展に大きく貢献できるという重要な側面を持つ。さらに、外交上、これらの国との協力関係・友好関係を強化することで、日本の国際的な地位を引き上げる効果も持つ。近年、中国や韓国との緊張状態が続く中、多くの国との友好関係を築いていくことは、地域の安定化に大きく寄与できる。

以上の観点から、脱原発の費用と便益を比較するとどちらが大きいだろうか？

地震による発電所の異常発生はなく、今回の原発事故は、津波による冷却装置の電源喪失が大きき要因であったという。このため、今後、原子力発電を「高炉ガス炉」というタイプの原子炉に転換していけば、この問題は解決可能である。この原子炉は、普通の原子炉と違って、運転するのに水が不要であり、何もなくても、炉心が自然に冷える設計になっているため、砂漠にも建設可能な技術で、日本はこの技術の研究開発では世界のトップランナーとなるほどの技術を持っている。さらに、この原子炉は小型で、万が一事故が起こっても、その影響範囲は小さいというメリットもある。このため、今回の原発事故を教訓に、新型の技術導入を進めることで、原発事故のリスクを大きく低減することができる。

このように考えると、現段階で、脱原発の不利益の方が、その利益を大幅に上回っており、「脱原発」は現実的な解決策ではないと考えられるのではないだろうか。

今のエネルギー問題に関する多くの議論は、原発事故による放射能汚染だけに焦点を当てた、偏った議論に基づいて世論が形成されているのではないかと懸念される。経済学が提示する「費用便益分析」の考え方は、ものごとを総合的かつ公平に判断するうえで、重要な視点を提供してくれる。私たち経済学部教員は、教育を通じて、学生たちに物事を広い視野に立って分析できる能力を育てていきたいと考えている。

グローバル人材育成の最前線に立って

豊田圭一 (1992年 経・経)



私の仕事は、現在、企業の若手社員（20代～30代）を東南アジア、インドなどアジアの新興国へ連れて行って短期間の研修を行う事業です。

大学卒業後、清水建設に入社しました。3年後に期するところがあって、留学コンサルティング会社を起業しました。15年以上にわたり、主にアメリカの大学、大学院に留学する日本人を支援してきましたが、3年前に新たに別の会社（スパイスアップ・ジャパン）を起し、行き先をアジアに変え、私自身がファシリテーターになって、独自の海外研修を実施しています。



グローバル化時代と言われて久しいですが、日本の少子高齢化が進む一方、若いマーケットが急速に拡大しているアジアの新興国でビジネスをするには、コストの安い国で製品をつくったり、安いものを仕入れて日本で売っていた時代とは求められる人材像が違います。さらに、中国や韓国の企業は勢いがあり、そういう彼らと競いながらそのマーケットを取るためには、ちょっと語学ができるとか、ちょっと頭がいいというだけではうまくいきません。

しかし、なかなかそういう人材がいないと各社から聞きます。私の会社のお客様はほぼすべてが1部上場の有名企業ばかりです。一流大学を卒業し、仕事もそれなりに出来る人たちが、新興国へ行くことを嫌い、新興国で自分の力でマーケットを切り開いていく自信はとてもないと言います。

だからこそ、多くに企業が「グローバル人材育成」に力を入れ、私にその仕事が回ってくるわけです。私が以前、サポートしていたような「留学」や「海外インターンシップ」では、いま求められている人材を育てることは出来ないと思っています。もちろん、それなりに長期間（1～3年以上）留学をすれば何か得られるとは思いますが、現実には企業がそこまで多くの社員を留学させる時間もお金もありません。だから、「3ヶ月くらいの語学留学でなんとかなりませんか」などと質問してくる会社もあります。

3ヶ月の語学研修が効果ゼロとは思いません。間違いなく「良い経験」にはなるでしょうし、多少は語学もできるようになるでしょう。しかし、「良い経験」で許されるのは学生までです。成果を求められるビジネスパーソンに、「良い経験」と「ちょっとの語学」をつけさせるために3ヶ月の留学をさせる余裕がどれだけの企業にあるでしょうか。

そうはいっても、多くの企業にとってグローバル人材育成は至上命題です。「短期間で、将来、グローバルな舞台で戦えるビジネスパーソンをつくるにはどうしたらよいか」その問いを考えてみて、私は「留学」ではないとの結論に達しました。

「日本国内で仕事ができるけど、海外経験が少なかったり語学に自信がないという理由で海外駐在に手を挙げない人材」のマインドと行動力を変えることが一番だと思いました。

私が主に提供している海外研修では、日本と異なるアウェイな国（ベトナム、カンボジア、インドなど）で、1週間にわたり、毎日「本気で取り組まなければ成果の出せない課題」を与えて、やらせています。受講生たちは慣れない環境の中で、最初は不安を抱えつつも、なんとかしようと懸命に課題に向かいます。そして、結果的に「やってみたらできた！」という自信と、「もっと仕事の力（専門性）をつけなければ！」「海外でやっていくには語学力をつけなければ！」という気づきを得るのです。帰国してから、今まで以上に仕事に力が入ると同時に、海外勤務への希望を持って語学の勉強を始める人も出てきています。

所詮、1週間ですから、私がやっている研修はただのきっかけにすぎません。しかし、グローバル人材育成のもっとも重要な最初の大きな一歩を担っていると自負して、この仕事に取り組んでいます。

（株）スパイスアップ・ジャパン代表取締役



「グルメをあきらめないで……」

マリー 秋沢（1993年比・文、経鸞会賛助会員）

この度はこのエコノミアンにて、ソフィアンの皆様に向け拙文を書かせていただき、とてもうれしく思います。今まで、ソフィアンとして世の中に役立つことができなかと考えてまいりましたが、今年5月に主婦の友社から、医学監修：白澤卓二先生、料理担当：マリー秋沢で『グルメを諦めず糖尿病が改善』という料理本を出ささせていただきました。この本では、今や日本で中高年の4人に1人が糖尿病や糖尿病予備軍といわれている中で、美味しく楽しく糖質制限食を実践しながら糖尿病の数値を下げて改善していきませんか?!という提案になっています。



今回の料理本には、なんと私の父が登場しています。父は医師なのですが50代から20年以上、糖尿病を患ってきました。外国で医師をしていたことのある父は、海外の文献などを読み、約10年ほど前、その当時病院で指導されていた（そして現在も）、糖尿病の患者さん向けの治療及び食事療法に疑問を抱き始めました。なぜなら、本人がいくら菓をしっかりと摂取して、カロリー計算して食事療法を行っても、食後の血糖値の数値は簡単には下がらず、合併症へのカウントダウンが始まると言われるヘモグロビンA1Cという値が年々上がっていったからです。父は早速、アメリカでは多くの方が実践して、合併症回避を成功させている炭水化物やパン、小麦粉製品を避ける「糖質制限食」を中心に、今まで沢山は食べてはならないと言われてきた肉やチーズなどをしっかりと食べて自分でコントロールをするように心がけました。要するに、従来の糖尿病患者に指導される食事療法、「カロリー制限食」を「糖質制限食」へとシフトしていったのです。するとどうでしょう?! 現在、77歳、おかげさまで合併症の兆しは全くと言っていいほどありません。これを目の当たりにした私は、この事実を多くの糖尿病の患者さんに知らせねば! という衝動に駆られ、料理を通して美味しく、合併症を防ぐための料理本「グルメをあきらめず糖尿病が改善」を出版いたしました。



糖質オフの料理例

この本では、実際に9ヶ月間、父に食事を作りながら、数値（血糖値、ヘモグロビンA1c）を計り記録しながら、約100品目の実証済レシピを載せさせていただきました。そして父以外にご協力いただいたお二人の糖尿病の方の食後血糖値の数値も記録しております。

今回はただレシピを載せさせていただきただけではありません。最初の章では、「100歳までボケない101の方法」「白米中毒」などの本でおなじみの、アンチエイジングの権威でいらっしゃる順天堂大学教授、白澤卓二先生による、糖尿病と糖質制限食に関する詳しい説明をわかりやすく書いていただきました。糖尿病の方のみならず、予備軍の方までしっかりと読んでいただいて最低限の知識をまず得ていただきたいと思います。糖質制限食を始めるにあたっての注意点もしっかり確認していただき、主治医の先生に糖質制限食を実践することを必ず伝えてから、試していただければと思います。



私のお役目は、これらの料理を実際に多くの方に作っていただくための活動なのですが、そのひとつがお料理教室です。現在は外苑前で定期的に教室をやっております。受けてみたい、と思われる方はホームページ (www.beautyneeds.net) で日程などを確認されてからメールでのご連絡 (amarie@beautyneeds.net) をお待ちしております。また、このクラスに平行して、男性が自立しお料理が作れるようになるための「男のための基礎料理」のクラスも実施しております。ご自分の身体のことを知り、そしてご自分が果たしてどのような食事をするのがベストなのか?などを意識しながら、ご自分自身で自由にお料理ができるように、まずは第一歩を踏み込んでみませんか?是非、お待ち申し上げます!

((有)ビューティーニーズ代表)



— 年会費納入のお願い —

同封の「払込票」にて年会費 3,000 円の払込をお願い致します。あわせて、寄付金によるご支援・ご協力をお願い申し上げます。



群れる人、群れない人

今泉 恂之介 (1962年文・独)



上智大学の文学部ドイツ文学科の卒業生(一九六二年)であるということを、私は時々忘れてしまう。卒業以来、絶えず上智の卒業生や現役と顔を合わせてきたが、相手はほとんど他学部の人たちなのだ。例外としてただ一人、Y君がいる。しかし彼とは柔道部のOB同士だから、同じドイツ文学科卒という意識がほとんどない。

私の在籍したドイツ文学科は一学年十数人という小世帯であった。「T大に落ちたから、ここに来た」と、ぼそつと言うような人が何人かいて、クラスには高校時代には経験したことのない重々しい雰囲気があった。

教室でたまに言葉を交わした時など、いい奴なのだ、と感じたこともあったが、彼らは基本的に独立自主の人であった。柔道部の連中と群を作ってキャンパスを闊歩し、教室ではバカを言う私やY君を、「幼い奴らだ」と見ていたような気がする。

自分の周りに壁を巡らせているような人が多かった。後に某官庁の長官を務めた人もおり、それぞれに立派な社会人になっているようだが、在学中、卒業後を通じて、いっしょに酒を酌み交わすような人は、Y君一人だけであった。

上智のドイツ文学科が、みな同じような雰囲気を持っていたわけではない。私たちの一年上である六一年卒の人々は、やはり十数人ながら卒業後も親しい関係を保ち、毎年のように会合を開いている。一年落第し、私たちの学年に降りて来た人(故人)も、そちらの会合には必ず顔を出していたという。

十年余り前、その一年先輩たちが数人集まって俳句の会を立ち上げた。主宰者が私の勤務していた日本経済新聞社の一年先輩だったものだから、「君も入れよ」と引っ張り込まれ、俳句を作るだけでなく、俳句史研究にも手を染めることになる。句会は順調に会員を集め、やがて「俳句振興」を目的とする日本初のNPO法人に成長して行った。

三年ほど前の柔道部OB会で、「俳句をやってみたい」と言い出した男がいた。すると誰かが「今泉は前から俳句をやっているぞ」と宣伝したのだから、「じゃ、あいつに教わろう」「俺もやるか」というのが五、六人出てきた。他大学の柔道経験者なども集まってきて、無骨な男たちが「五七五」と指折り数えるようになった。

始めた当初から、この俳句会は続いて行く、という確信を持っていた。元柔道部のマネジャーと会計担当がいた。ソフィア会の幹事も入ってきた。このような核があって、人は集まり、会が永続することになる。柔道部経験者が多いところから「三四郎会」と名付けた句会はすぐに十数人の楽しい集いとなり、順調な歩みを見せている。

七十歳代も半ばに近づいた一昨年、私たちも卒業以来五十年の「金祝」を迎えた。Y君がドイツ文学科の幹事を引き受け、十数人の住所などを調べ、金祝の会のお知らせなどを送ったが、集まりはやはり思わしくなかった。立派な立場の人からの「このような知らせは不要」というような返事もあった。

金祝に出席したドイツ文学科卒は結局、Y君と私、それに女性が一人の三人だけだった。女性は他学部、他学部の女性たちと楽しそうに語り合っており、Y君と私は柔道部の仲間や他学部の顔なじみの中に混じって行った。

人間も他の動物と同じように、群れる人、群れない人がいるようである。群れたい人、群れたくない人、という言い方も出来るだろう。「おい、こういう会があるぞ。入れよ」と誘われると、ついつい入ってしまうのが群れるタイプである。私は典型的な群れタイプではないが、群れたい気持ちを失ったことはない。

いま私は五つの俳句会に属している。もう一つ、囲碁という趣味があって、これも誘われると断りにくい。これまでは二つの囲碁会に顔を出していたが、近年は柔道部OB会が創設した紀尾井柔道クラブの「囲碁分科会」にも参加するようになった。句会、囲碁会だけで、月に十日ほどだから、日程的、体力的に結構たいへんなことになっている。

もう後期高齢者であり、人との付き合いは減らしていかざるを得ない。高校同期のゴルフ会は「大団円」の動きが出てきた。俳句や囲碁はもう少し続くはずだが、やがては家に籠り、本を読んだり、パソコン画面を眺めていたりする日が多くなっていくのだろう。ドイツ文学科同期の、あの無口な思索者たちのことが、何となく親しく思われるようになってきた。

経鷲会奨学金受賞のお礼

岡島 礼 (在学3年生 経・営)

上智大学経済学部経営学科3年の岡島礼です。本日は経鷲会奨学金の受賞に加えて、エコノミアンに寄稿出来る機会を頂き、誠にありがとうございます。

(1) 食事トレーの広告事業化

私は、高校生時より継続して東北の復興支援ボランティアへ携わらせて頂いておりました。その中で感じていた問題意識は、素晴らしい活動をしているが社会に認知されていないNPO, NGOが数多く存在し、彼らを支える基盤が日本には存在しない事でした。そんな問題意識を抱えて大学生1年間過ごしていく中で、これらの社会貢献団体が直面している問題は活動資金の不足にあると考えました。なんとか支援出来る手だてはないかと考えた所、大学には多くの資源が存在し、しかしそれが最大限利用されていないことに気がつきました。その中でも他大学で採用例の多い食事トレーの広告事業に着目をしました。上智大学でこの仕組みが取り入れられていない理由として、上智大学では学内での営利活動を全面禁止しているとの仮説を立て、経営学科のメンバー3名と学生団体CrossArtsを設立し、その上で大学へのヒアリング調査と企業への渉外交渉を同時並行して進めていきました。その結果、自分達の立てた仮説が正しいと確信し、関係者である上智大学、企業、食堂、学生、CrossArts間の利害関係の調整を行い、具体的な価格交渉のとりまとめを行いました。結果、年間広告収益を元に約150万円をNPO, NGOへ支援金として寄付出来る仕組みを構築する事が出来ました。今回のプロジェクトはOB, OGの方々、学事センターの方、そしてプロジェクトメンバー、多くの方々の支援のおかげであり、この場を借りて御礼を申し上げます。



(2) 上智での学生生活と将来のこと



大学1年生の時から、OB, OGの方々、他学部、他学科の学生、先輩との繋がりを強く持てるのが、上智大学で得られた一番の財産であると思っています。国内外問わず様々なバックグラウンドを持つ人の中で自分自身の感性や価値観が大きく変容し、その結果として、学問、課外活動、ボランティア、スポーツ、キャリア観、サークル活動と自分自身の可能性を大きく広げる事が出来たと考えております。10000人と他大学に比べて学生の数では勝てないものの、OB, OGの皆様と距離が近く、学部間での交流が密である上智大学であるからこそ、楽しい事、辛い事、嬉しい事、悲しい事、あらゆる困難、あらゆる機会に触れ自分の可能性を拡げてくれたのだと感謝しております。これから卒業までも、この恵まれた環境を無駄にせず挑戦をして、悔いの残らない大学生生活にしていきたいと思っております。

最後に、私自身の将来の展望についてお話しさせていただきます。私は上智大学に入り、多くの方々に支えられてあらゆる挑戦が出来たと考えております。その中で強く意識したのが教育理念でもある「Men and Women for Others, with Others」です。他者の為に、他者と共に。このとても短い言葉には自分の人生の本質が隠れていると思います。今までは漠然と努力をし、漠然と過ごす日々が多い中で、自分自身を大きく成長させ、豊かな心や、幸福を与えてくれた瞬間には、必ず自分の為ではなく他者の為にとという心、他者との繋がりサポートの中で挑戦が出来ている自分がいました。だからこそ次は自分がPay forwardの精神を持ち生きていく中で、この教育理念を体現できる人間へと成長し、仕事を通じて社会へ恩返しをしたいと思っております。

西澤ゼミ 新日本監査法人オフィスツアー報告

桑原 清幸 (1995年経・経、経鷲会財務委員長)



私が勤務している新日本有限責任監査法人では、7月16日に、経営学部西澤茂教授のゼミに所属する現役生33名をお迎えして、当監査法人では初となる上智大学とのオフィスツアーを行いました。

グローバルで約17万人のプロフェッショナルが所属する会計事務所 Ernst & Young (EY) のメンバーファームである当監査法人では、多くのソフィアンが公認会計士や各分野のプロフェッショナルとして活躍しています。現役学生にとっては、普段あまり接することがない「監査法人」という職場を実際に見学していただき、OBの会計士と直接ディスカッションできたことは、学生にとっても大いに刺激となり、また我々にとっても念願のソフィア現役生との交流会となりました。

オフィスツアーは、最初に、経鷲会幹事の松本正一郎シニアパートナーからウェルカムスピーチをいただき、次に、会計士が実際に働いているオフィスフロアに移動して、職場の雰囲気を感じていただきました。

会場に戻り、経済学科OBの田中泰生マネージャーから「アカウンティングファームで働く魅力」というテーマでプレゼンテーションがありました。会計監査の経験を生かしながら、現在は不正調査コンサルティングという新たなフィールドで活躍している田中会計士から、仕事のやりがいや、活躍の場がグローバルに広がっていること、会計監査以外にも様々な魅力的なフィールドが用意されていることを紹介しました。

続いて、当監査法人の会計士によるパネルディスカッションです。経鷲会幹事の百井俊次シニアパートナーがパネラーとなり、現役学生に向けて熱いメッセージを伝えていただきました。今後会計士として活躍するためには、チームを円滑にまとめるためのコミュニケーション能力や、グローバルでプロジェクトを推進していくためのリーダーシップが非常に重要であること、そして、ぜひ我々の業界に入って活躍していただき、将来EYグローバルの会長を目指してほしいといったお話がありました。



前列中央が西澤先生、その右へ松本さん・百井さん

その後は、参加者が各班に分かれて、グループディスカッションを行い、活発な質疑がありました。

全体を通じて、参加した学生から「想像していたよりも幅広い仕事をしていてカッコイイ」「会計士のイメージが変わった」といった感想が寄せられ、ソフィアンとしてとても嬉しく思いました。このような貴重な場を実現していただいた西澤先生に深く感謝するとともに、今後とも学生との交流を継続していきたいという思いを強くいたしました。

経鷲会だより

○第2回ゴルフ・コンペ

4月29日、千葉県柏市「藤ヶ谷カントリークラブ」で行いました。昨年は3月でしたが、花粉症の方々のことを考えて今年は4月としました。ところが、この日がなんと年に数回しかない授業の日と重なり、出席予定の西沢先生（経営学科長）ほかが欠席、その他のキャンセルもあり、参加者は6名でした。本多・戸川両名誉顧問にも出席いただき、戸川さんの優勝で無事終了しました。

来年は先生のリクエストで、大学が休みの3月21日に行います。コースは決まり次第お知らせします。（副会長 田村 隆）



○定期総会のご案内

下記にて定期総会と懇親会を開催します。多数の皆さまのご参加をお待ちしております。

場所：12号館 201教室

とき：2014年10月25日（土）13:00 代議員会、総会

13:30 講話：山田学部長

14:00 講演：戸川 清氏（前日立化成・専務営業本部長、71年経・経）

15:30～17:00 懇親会（9号館カフェ）

17:00 閉会

以上（総務委員長 三輪一夫）